杉谷眞佐子／高田博行／浜崎桂子／森貴史編著

『ドイツ語が織りなす社会と文化』

大阪．関西大学出版部．2005年．

山　崎　雄　介

近年，大学によって名称は様々であるが，いわゆる「独文科」のみならず，おおよそ「○○文学」を標榜する学部や学科を取り巻く環境は大いに変容してきていると言われている。これには，大学で学ぶ／研究するということが学生にとって意味するものが変わってきた，社会が学生に求めるものが変わってきた，「活字離れ世代」には文学に触れる習慣も薄れてきた，など，考えられる理由は多々あろうが，いずれにしても「独文科」が変化を迫られている，変化しつつある，もしくは既に変化していることは確かである。そうした現状に鑑みれば，大学における「独文科」というものの意味そのものを改めて問い直すこと，また，「独文科」に秘められている可能性を探ること，そして「独文科」の姿を見つめなおすこと，こうしたことはきわめて重要なことであろう。

まさに本書は，それが具現化されたものである。「大学でドイツ語やドイツ文化を専攻しようとする学生を念頭に書かれた」（「まえがき」より）本書には，主としてドイツ語圏の言語，文学，文化に関して21本もの論文が収められており，目次を見ただけで既に非常にわくわくさせられるものがある。それらの論文は6つのセクション：

ドイツ語の地位
メディア社会を織りなすドイツ語
Germanistik から Kulturwissenschaft へ
異文化コミュニケーションと外国語教育　―多文化社会に向かって―
ドイツ以外のドイツ語圏の文学
文化史からのアプローチ

に分けて掲載されている。それぞれのセクションに収められている論文の概要は本書内の各セクションの始めに書かれているので，ここでは簡単に紹介するにとどめ，むしろ，これから本書を手にする方々に本書の見どころをセクションごとにダイジェスト的に示すことに紙面を割くことにする。

「ドイツ語の地位」

1. ウルリヒ・アモン（高橋秀彰訳）：欧州連合 (EU) における言語政策―ドイツの言語政策を中心に―

2. 高橋秀彰：欧州の統一と多言語主義—拡大と多様化の中で—
3. 高田博行：ドイツ語の近代化への歩み—造語力に裏打ちされた文化言語の「発見」—

このセクションではまず，ドイツ語そのものの位置づけがなされているが，アモンは使用人口や通用地域などといった一般的な情報の提供に終始せずに，特に欧州連合 (EU) の中においてドイツ語の置かれている立場や担っている役割はどのようなものであるのか，つまり EU 内の言語や方言の社会言語学的類型を示した上で EU 諸機関の作業言語や公用語をめぐる事情にも言及しており，一読で EU 内でのドイツ語の現状を立体的に把握できる。そして，こういったことについて現在の状況の紹介だけでなく，例えば EU 内でのドイツ語の地位を確保するためにドイツ政府は消極的であったという歴史的，政治的経緯も踏まえながら詳細な数量データと併せて論じている。また，過去と現在にとどまらず，EU の（多）言語政策の将来的な展望についても述べているのが高橋だが，これは EU 市民に対して定期的にアンケート調査を行っている機関が発行している刊行物「ユーロバロメーター」(Eurobarometer) が行ったヨーロッパ諸国における外国語の意識調査などに関するアンケート結果を分析しながら論ずるという形となっており，非常に説得力があり，かつ，読みごたえのある内容となっている。さらに，高田はドイツ語とそれを取り巻く周囲の状況に関して 15 世紀から 18 世紀という時代に焦点を当てて通時的に概観しているのだが，規範としてのドイツ語の成立過程を追ううえで非常に興味深い。

「メディア社会を織りなすドイツ語」

4. 脇坂　豊：テクストからメディアへ —「くりかえし」機能を中心に—
5. 渡辺　学：携帯メールの日独語比較対照—文字と視覚記号によるコミュニケーションのあり方—
6. 白井宏美：チャット・コミュニケーションの日独比較—コンピューターメディアによる「会話」の交わし方
7. 細川裕史：マンガの翻訳方法をめぐって—日本語オノマトペのドイツ語訳—

前セクションとは異なる切り口でドイツ語に迫っている本セクションでは，従来のドイツ語（学）研究から，さらに対象が拡大していき，研究方法も多様化していく，という可能性が読者に紹介されている。

脇坂はまず，従来のドイツ語学のみならず言語研究全般の中心でもあった語と語のつながりによる「文」から発展して，文と文のつながりによる「テクスト」を研究対象とする「テクスト言語学」をソシュールなどにも触れながら紹介している。そして，例えば初めに出てきた名詞が次には指示代名詞，その次には人称代名詞，といった形でテクストの中で何度も登場する「くりかえし」機能や，テクストの中でひとつの話題が継承・記述されていく「くりかえし」機能について論じる。脇坂は，後者の「くりかえし」は人類という

「テクスト」の中での「文化の伝承」と重なり合うとし，メッセージを受け手に伝えようとするという意味でテクストは「媒体」として機能しているとする。このようにしてテクストについての考察がメディアの観察に重なりつつあるということを指摘することによって，メディアについて考察する際の指針が与えられている。

続いて，携帯電話のメール，コンピュータを用いたインターネット上でのチャット，日本語から続々とドイツ語へ翻訳されるマンガのオノマトペといった，いずれもニューメディアと呼ばれているものについての実証的な研究の手法が紹介されている。

渡辺は日独両方の携帯電話メールテクストのコーパスを使用して収集したデータを，音韻論，形態論，統語論，語用論といったあらゆる側面から分析し，考察を試みている。特に若者の間で好まれ，多用されているいわゆる「顔文字」や「絵文字」についての考察が読者の目を引くことだろう。このような非言語的（図像的）なコミュニケーション補助手段は日独双方の携帯電話メールで随所に見られ，両言語において形式の面でも機能の面でも共通性があることが分かる。携帯電話メールは書き言葉であることには違いないのだが，しかし多分に話し言葉の要素も含むものである。両者の中間的存在とも言える。そのような「新たな口語性」研究の今後の展開を期待せずにはいられない。

書き言葉でありながら話し言葉に近いという点ではチャットが携帯電話メールに勝る。チャットに関する日独比較をしている白井の特異な点は，「動詞語幹辞」というものに着目していることである。これは，文字だけでコミュニケーションを図るチャットに，ちょっとした感情表現を加えるもので，代表的なものには動詞 grinsen の語幹だけをアステリスクで囲った「*grins*」や，それを短くして頭文字だけにした「*g*」などがある。これはちょうど日本語でのチャットに見られる「(笑)」や「(w」に対応しているようにも見える。また，チャットの場で繰り広げられる「会話」本体の日独比較にとどまらず，書記法のスウィッチング，相手が見えない状況での自己演出，あいづちの打ち方など，多岐にわたる日独比較をし，そこから両国の社会状況の相違点を浮かび上がらせている点は注目に値する。

日本語のマンガに数多く登場するオノマトペがどのようにしてドイツ語に翻訳されているのかということに着目した細川は，ドイツの大学生を対象に行ったアンケート調査をもとにドイツにおける近年の日本マンガ受容の状況に触れつつ，マンガ翻訳，特にオノマトペの理想的な翻訳方法について考察し，将来的には日本語のオノマトペがドイツに「直輸入」され，定着する可能性も指摘している。

このように，普段，何気なく使っている情報ツールや何気なく読んでいるマンガにも研究の材料は潜んでおり，アプローチの方法も多種多様であることを，このセクションは教えてくれる。しかし同時に，そのようなアプローチには従来のような形でのドイツ語学だけでなく社会学，心理学，コンピュータ工学などといったさまざまな分野からの幅広い知識が必要とされるということも，このセクションは示している。

「Germanistik から Kulturwissenschaft へ」

8. ハルトムート・ベーメ（森貴史訳）：ドイツ文化論とは何か？
9. 浜本隆志：新しいドイツ学へのアプローチ
10. ローベルト・F・ヴィットカンプ：ドイツ語圏日本学の歴史—文化論としての日本学は可能であるのか—

このセクションでは「ドイツ文化論」(Kulturwissenschaft) とは何であるのかという問いから出発して，「ドイツ文化論」を学問として大学で扱う方法，そこにある可能性，また問題点が指摘されている。

まずベーメは「ドイツ文化論」が歴史的にどのように成立したのかということを，ギリシャ・ローマ時代にまで遡ってヨーロッパの学問体系との関係を顧慮しながら，時代を追って述べる。

このセクションで非常に興味深いのは，それに続く浜本である。浜本は，日本の大学の「独文科」が置かれている現状を，関西大学文学部ドイツ文学科の学生の卒業論文のうち1990年度に提出されたものと2003年度に提出されたものとを比較して，「わずか13年のうちに、急激な学問領域の地殻変動があった」ことを示す。つまり，想像に難くないことだが，1990年度と比べて2003年度では，「ドイツ文化論」を扱った卒業論文が増加しているのである。学生の興味・関心が多様化しているのは良いとして，大学で学問として研究する以上はそこに確固たる方法論がなければならないとして，今日的な「ドイツ文化論」へのアプローチ例を浜本は3つ（「グリム童話」，「食文化」，「ドイツ事情」）提示している。「グリム童話」では「かえるの王様」に見られるような，姿を人間に変えた動物と人間との婚姻というモチーフを，同じく動物と人間との婚姻がテーマになっている日本昔話の「ツル女房」などと比較し，また，背景となる文化の日独比較をするという方法論が紹介されている。「食文化」では，プロテスタントと飲酒の関係を眺めながらヨーロッパにおけるコーヒー受容やカフェハウス文化との関わりなどを考察するという方法が，「ドイツ事情」では，ガストアルバイターを中心とする外国人問題から出発してグローバル化した時代の国家やコスモポリタンのあり方を探るヒントが紹介されている。浜本は最後に，特に現代ドイツ事情研究においては常に最新の情報を取り入れるべくアンテナを張り巡らせておく必要があるということを指摘し，その際に例えばインターネットやフィールドワークという調査手段が有効であるとしているが，このような研究を可能にするには教員にもそれなりの準備と努力が求められることにも浜本は言及している。これは大学生のみならず専門研究者にとっても必見の内容と言えよう。

ヴィットカンプは逆の視点から，つまり，日本の大学における「ドイツ文化論」とは逆に，ドイツの大学における「日本学」（ヤパノロギー）について，その歴史，「文化論としての日本学」の可能性について述べている。ここでヴィットカンプが指摘しているのは，「日本学」において問題設定の方法論が欠如していたことが原因で日本に関する文献学や文学研究が絶滅の危機に追い込まれた，ということである。しかしながら，主要な大学における日本学を扱う学科の設立・廃止に関する調査や最近40年間の専攻学生数の推移を見

てみると，一部の大学で日本学が廃止になってはいるものの全体として見れば日本学は廃れるどころか，日本経済のバブル崩壊以降も人気を博しているということが分かる。ドイツの大学における「日本学」には日本の大学における「ドイツ文化論」と似たような問題があるようであるが，その一方で，学生たちの日本に対する興味・関心は高まっているのである。

「異文化コミュニケーションと外国語教育—多文化社会に向かって—」

11. アレクサンダー・トーマス（杉谷眞佐子訳）：異文化コミュニケーションと外国語学習
12. 杉谷眞佐子:異文化コミュニケーション能力の育成と外国語教育—外国語教育と異文化理解教育を統合する可能性—
13. 辻　香里：ドイツ語学習と異文化学習—なぜ「ランデスクンデ」なの？—
14. 浜崎桂子：ドイツ語文学は誰のもの？
15. ザフェル・シェノジャック（杉谷眞佐子訳）：私はいつも別の方角からやってくる

このセクションで扱われているのは，単なるファッションブーム的な「国際化」や「異文化交流」の話ではない。「異文化」と日常的に隣り合う今日，「異文化」と共生していく道を探ることは急務であるし，その際にまず重要な役割を与えられるのは「教育」である。「異文化コミュニケーション」の際に生じうるズレとしてトーマスは，ドイツ人と中国人との商談の失敗やアメリカに留学したドイツ人学生の体験談を例示し，その例から行動の「文化的標準」を探り，可視的な表層としての文化だけでなく「文化の深層」を知ることが重要であると説く。この「文化」概念の考察からトーマスは，異文化コミュニケーション能力育成に重点を置いた今後の外国語教育のありかたについて，言語知識の教授だけでなく，学習者の将来を考慮して異文化対応能力のための学習が不可欠である，と提言している。

複数言語学習や二言語教育を推進するなど，日本とは異なるドイツの外国語教育や外国語教育政策を分析・考察している杉谷もまた，異文化コミュニケーション能力を高めるには言語知識のみならず「日常的な社会・文化知識」の並行学習が大変重要であるとしている。

続く辻は「ランデスクンデ」がドイツ語学習においてどのような役割を負うことができるのかということに関して，ドイツにおける外国語教授法の展開と，そこでランデスクンデがどのように扱われてきたかについて歴史的に概観する。そのうえで日本におけるドイツ語教育にも言及し，国際社会に対応できる人材を育成するためにはコミュニケーションツールとしての言語技能の育成のみならず，「ランデスクンデ」を取り入れた異文化理解の促進も重要であると述べている。

ここまでの３人はいずれも旧来の言語知識偏重型の外国語教育から離れて異文化理解に主眼を置いた教育の必要性を説いており，外国語教育の変容の必要性がひしひしと感じら

れる内容となっているのだが，ただ，辻では日独両国での外国語教育の発展の概観と「ランデスクンデ」の重要性との間の関連性に若干説得力が足りないようにも思われるのが残念である。いずれにしても，日本における外国語教育に対する提言そのものは，学生よりもむしろドイツ語教育に携わる者にとって非常に有意義であることは言うまでもない。

上出の3人とは趣を異にして，浜崎は，いわゆる「マルチカルチャー文学」を扱っている。ガストアルバイターをはじめとする移民だけでなく，例えばエリアス・カネッティやパウル・ツェラーン，多和田葉子といった，あえて「非母語」であるドイツ語で仕事をする作家たちによるこの「マルチカルチャー文学」というものについて考えると，「文学」もまた多文化社会における「異文化理解」という点において重要な役割を担っているということを認識させられる。

まさに浜崎が扱っている「マルチカルチャー文学」の担い手とも言えるシェノジャックは，多言語社会が促進されつつある中で「母語」だの「非母語」だのという概念をいまさら持ち出してくるドイツ社会の矛盾を，自身の生い立ちも交えながら，短い作品の中で描き出しており，ドイツ社会の抱える問題を巧みに浮き彫りにしている。

「ドイツ以外のドイツ語圏の文学」

16. 鈴木伸一：オーストリア文学の射程—オーストリア文学理解の一助として—
17. 増本浩子：スイス・ドイツ語文学を読むための基礎知識

さて，ゲルマニスティクを扱う学科は多くの大学で「ドイツ文学科」「独文科」などといった呼称となっていることと思うが，しかし，そこで扱うものはドイツ連邦共和国やかつてのドイツ帝国の言語や文学のみではないことは改めて言うまでもない。そもそも「ドイツ」という名称を冠する国家が存在するのは近代になってからのことである。

「ドイツ以外のドイツ語圏の文学」として二人の執筆者が扱っているのはオーストリアとスイスである。ドイツ語はこれら両方の国で公用語であり（スイスでは四つの公用語のうちのひとつ），両国は地理的，歴史的，文化的にドイツと密接な関係にあったのだが，しかし同時に，ドイツとは異なる面も多々ある。そのようなことを鈴木はオーストリアについて，増本はスイスについて，歴史と文学史を俯瞰しつつ，現代のそれぞれの国での文学の潮流についても紹介している。

「文化史からのアプローチ」

18. 北原　博：18世紀の秘密結社—その社会・文化的機能—
19. 高池久隆：1800年前後ベルリンの「サロン」に迫る—その可能性と問題点—
20. 滝本勝美：ようこそ，あなたの知らないドイツ語料理レシピの世界へ
21. 森　貴史：船の上で食べて，嗅ぐ—クックの世界航海を描いたゲオルク・フォルスターの航海記から—

最後のセクションでは「文化史」がテーマとなっている。ゲルマニスティクが従来のような「語学・文学研究」にとどまらず「ドイツ文化論」をも内包するようになった経緯については本書第3セクション「Germanistik から Kulturwissenschaft へ」の中でも特に9. 浜本を参照されたい。ここでは4論文が実際に「ドイツ文化論」という領域に対するそれぞれ独自のアプローチを展開している。

ここで個々の論文を紹介する紙面の余裕はないが，総じて言えることは，「新たな視点」「斬新な切り口」と一口に言っても，それはただ単に虚を突いた突発的な奇襲戦法などではなく，そこにはしっかりとした知識が要求されているということであろう。いわゆる「文学史」や「文学」そのものに関する知識はもとより，例えばバックグラウンドとなる当時の社会の状況や研究対象の周辺事象，さらには文献学的なことに至るまで，さまざまな知識が要求され，その上にはじめて「文化論研究」というものが成り立つのである。ひょっとすると，要求される知識量，読書量は，文学研究で要求される数倍以上かもしれない。「文化史からのアプローチ」には，そういった認識が不可欠であるということを，このセクションは十二分に示してくれている。

*

敢えて全体的なことを言うと，本書に一貫しているのは「読者に対する配慮」である。挙げれば際限がないが，例えば通常であれば注を付さないような箇所にも丁寧な注が付されており，また，各論の末尾に挙げてある参考文献が，分野・領域ごとに分けてある。また，高田，白井，森がそれぞれ書いている〈コラム〉にも，読者への配慮が滲み出ている。本書は大学の「ドイツ文学科」で研究しようとする（もしくは既に研究している）学生を念頭において書かれたものである，ということが改めて分かるが，しかし同時にこれは専門研究者にとっても非常に示唆に富む内容のものであろう。